

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ⑤

——水色のノートから——

丸山ふみ

運動会の前日

夕方まで降っていた雨も幼児たちがテラスや靴箱の横に下げた大小さまざまな「てるてる坊主」の願いを聞きとどけてくれたのか風にかわり、短時間に準備を終了し〇先生と園舎の戸締りをすませて見上げた空には星が光っておりました。

暗闇の中で白くテントが浮き上がっているまわりに人影が動いているのは、明日のために観覧席の確保にやってきた父母たちです。

このように、家族総出で、いや地域の多くの人達さえ楽しんで待っていただけの運動会ですのに障害をもつ幼児が在籍している年をはじめて運動会を迎えるように不安になる自分

が情なくなるのです。

それは、幾年も前のことですが級を担任していた頃運動会の前夜、「明日の運動会やっぱり休ませます。お祖母ちゃんがどういっても承知しないのです」と電話をかけてきた母親の泣声がいままで心から去らないのです。

障害児に対して一般に理解が深まり幼児の集団の中で障害があっても、我が子が成長していく姿に自信がもてるようになって、運動会という行事のなかですごく一日が決して楽しいものでない家族もあるのです。

昨年は、一四九名の四歳児のなかに、小児てんかん症、自閉症、難聴などの障害をもつ幼児が五名いて、その幼児たちに対してそれぞれの担任の示す愛情や苦心はどんなに文字を並べても空虚になってしまうような日々がつづいていました。

種目の選定・演技中の進行などを協議する時、五名の幼児の側に立っての立案はなかなかうまくいかないのですが、「先生、そんなに心配しなくても大丈夫よ」と担任を励ましながらも、ひとりひとりの幼児を大切にすることが運動会という園全体の行事を成功させることになると自分自身がいい

きかせているのです。

動物の行進

次の日は快晴に恵まれ、プログラムは順調に進み、「次は四歳児の表現遊び・動物の行進です」と進行係の晴れやかな声が園庭一杯に流れます。

入場門の前には五色のクラスの旗を先頭に整列している幼児の姿をテントの中から目で追っていきますと多くの幼児たちの嬉しそうな顔の中に、M、H、T、K君もまじっており緊張している担任とは対照的な幼児たちの動きです。

スピーカーから流れる音楽にのって馬になったり象になったり蝶のように跳ぶ幼児の動きに観客席から拍子が贈られています。小児てんかん症のM君はスキップができませんが彼自身は、嬉しそうに担任に手をつないでもらい、リズムにあわせて動いています。

でも、自閉症のH君は両手で耳をふたして立っています。そのまわりで目立たぬように担任はさりげなく彼の身体を動かして他の幼児の動きに支障のないように配慮しています。障害をもつ幼児の集団はギクシヤクする。しかしそれが人間

の社会というもので障害をもつ幼児のいる級こそ人間関係に幅のある級づくりができると文章では読んでも、みた眼にはさりげなく動いているが担任の汗に光った顔や、緊張した表情をみているこの数分間は園長として長くつらい時間です。

運動会が終って担任に深々と頭を下げて帰られるH君の母親が、五月下旬連絡ノートに「初めての保育参観に出席させていただき、お友達とはずれた行動をとるのがやはり少々気になりましたが、いつかきつとみんなについていける日がくると信じ自分を勇気づけました。(以下略)」と記されていたが、私共もまた、障害のもつ特殊性に目をうばわれて幼児のもっている発達課題を見失ってしまわないように努力したいものです。

数百名の観客のみる真中で両手を耳にして立っているM君が担任がすこし身体にふれるだけでその場所を移動することができるということは、会話の成立しないM君に担任こそ自分を守ってくれる味方なのだという信頼感が四月以来の毎日毎日の中で培われ、そのことが保育の基本なのだと改めて学んだ一日でした。

(松阪市立松江幼稚園)